慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	東日本大震災からの復興と教育を考える : 学びをつなぐ・つなげる学校現場の取組
Sub Title	
Author	藤坂, 雄一(Fujisaka, Yūichi)
Publisher	慶應義塾大学教職課程センター
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学教職課程センター年報 (Annals of the Teacher Training Center Keio University). No.31 (2022.) ,p.93- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	日時 : 2023年1月24日 (火) 16:30 ~ 18:00 場所 : 慶應義塾大学三田キャンパス南校舎473教室
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10203872-20230831-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東日本大震災からの復興と教育を考える

～学びをつなぐ・つなげる学校現場の取組～

藤坂　雄一氏

（宮城県石巻市立大谷地小学校教諭）

日時　2023 年 1 月 24 日（火）16:30 ～ 18:00
場所　慶應義塾大学三田キャンパス南校舎 473 教室

§　はじめに

避難訓練が学校でよくありますが、「今日の避難訓練は 90 点です」というフレーズを聞きます。私も（確かにそういうことを言っていたなぁ）と思い返すのですが、実際に震災を経て、避難に 90 点はなく、0 点または 100 点しかないのだと考えるようになりました。お預かりしたお子さんを無事に家庭におかえしするという「当たり前のこと」がいかに大切なことだったのかということを、震災の経験を経て、改めて認識するに至っています。

§　さあ、対話を始めましょう

さて、12 年という月日がたちます。宮城県では「13 回忌」という言葉も耳にするようになりました。こういうテーマで依頼をいただくとは思わなかったものですから、とても驚いています。そして、このように東京の地で、このテーマでお集まりくださる皆さんがいらっしゃることにも本当に感動しています。ぜひ一緒にこれまでの 12 年という時間を振り返ることができたら……と思っています。私の与えられた時間の中で皆さんのニーズにどれだけ応えられるか不安ではありますが、このご縁に感謝して、心を込めて伝えたいと思います。どうぞお付き合いください。よろしくお願いします。

大阪の大学で話をする機会をいただいた時に、「先生、講演は笑いを取ってなんぼ

だから」と言われましたが、このテーマで笑いを取れとというのは、かなり難しいことです。あらかじめ申し上げておくと、そんなに笑える部分がないということをご了承ください。前半は少し息詰まるところも出てくるかと思うので、どうぞ無理はなさらないでください。そんな思いは近くの人と交流できるようにしたいと思います。

最初に、会場の皆さんは「あの日」（私はよく「あの日」と使います）2011 年 3 月 11 日に、どこで何をされていましたか。それから、今日ここに来られた目的や問いをお持ちでしたら、交流していただきたいと思います。席を移動なさっても結構です。よろしいですか。

いつもこの交流をいろいろなところでさせていただくと、この時の動きにより、今日の会場の皆さんはどんな感じなのかとリサーチするのですが、本当にきっとすてきな皆さんですね。こうやってパッと集まっていただけるのはありがたいと思います。パーソナルな部分も出てくると思うので、「話したくない時には無理して話さない」というグランドルールでお願いします。

では、何人組になっていますか。学校現場だと、グループになってもたいがい校長先生が 1 人で話して終わることもありますよね。それではスタートします。よろしくお願いします。

（グループ交流）

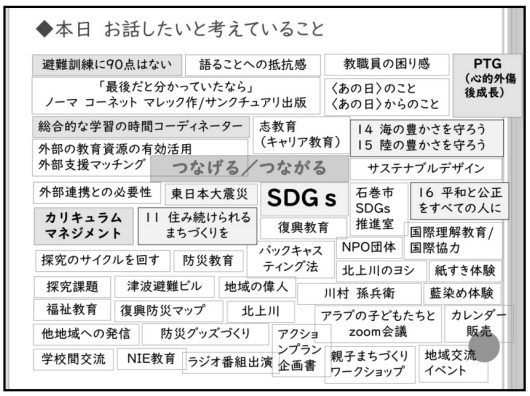
時間が足りないですよね。続きはまた後でということでお願いします。まずは、ありがとうございました。

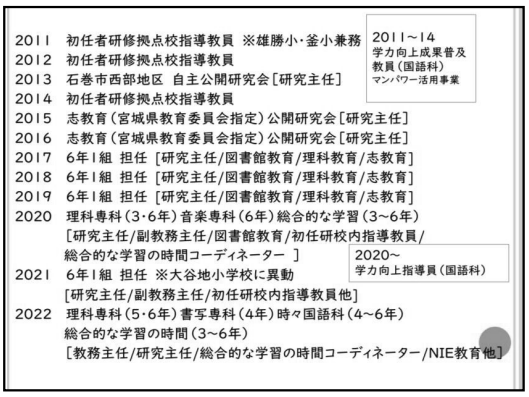
すてきな皆さんが集まってくださいました。こういう時にポツンと 1 人になっていた方はおられませんでした。フワッと笑い声が出てくることはとてもいいチームですよね。それでは、少しきつい話が前半は続きますが、聴いていただければと思います。

「あの日」から新聞の葬儀案内の欄を見ることが多くなりました。震災で犠牲になった方の名前と年齢から、我が子の葬儀の喪主をする父親の気持ちを想像して辛くなります。私の中学校の同級生の友人は 4 月に第一子が生まれる予定でした。私も 4 月に娘が生まれる予定でした。そんな 3 月を過ごしていた彼は、普段通り働いていたのであれば内陸部の津波は来ないところにいたはずでした。たまたま「あの日」は石巻の海の近くのところに商談があったのでしょうか。出張で訪れていたそうです。彼はわが子を抱きしめることができませんでした。どんな無念な思いだったのだろうかと思います。

また、大川小学校という学校の名前は、もしかすると聞いていますか。私の同期だっ

た友人は当時、大川小学校で教員をしていました。最後まで子どもたちに寄り添い、子どもたちを抱きしめながら遺体で発見されました。中学校の娘さんがお別れの手紙を葬儀の時に読んでいました。（もう一度会いたい）という思いが会場を包みました。最後まで子どもたちを守ろうとした父を誇りに思うと話している姿が報道されていました。命を守ることができなかったという十字架を私たち教職員は背負わなければなりませんが、それまでの教師生活を否定されるものではないということをここでお伝えしたいと思います。





今日お話ししたいことはこれだけ（右上図）ありますが、時間の中できっと間に合わないと思います。そこで、本日の補助資料（当日配付資料）としていろいろな読み物を用意してあるので、こちらで補いたいと思います。時間までに全部話し切れなかったら、申し訳ありません。はじめに謝ります。

私の12年間です。石巻市立雄勝小学校で3月に被災しますが、4月には釜小学校という沿岸の学校に異動します。岩手県や福島県の異動はなかったですが、宮城県は人事異動を行いました。行ってすぐの私の仕事は初任者研修の拠点校指導教員といって、学校を一週間に4校訪問し、そこに新任で配置された教員の指導に当たります。学校に来た時の最初の仕事はヘドロかきですから、新任の先生も大変です。そして、私はいろいろな学校を回り、いろいろな支援や子どもたちの様子を見ることになります。

「志教育」とは宮城県のキャリア教育というイメージです。「人や社会とかかわる中で社会性や勤労観を養い、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考えさせながら、将来の社会人としてのよりよい生き方を主体的に求めさせていく教育」と、宮城県教育委員会は説明しています。そんな力を育てる指定校となり、研究主任として校内研究を推進してきました。その後、6年生を3年連続担任します。その後は総合的な学習の時間コーディネーターや副教務主任を担当。大谷地小学校に2021年、昨年異動して6年生の担任をし、2022年の今年、理科専科、書写専科、時々国語科、

そして総合的な学習の時間をしながら教務主任、研究主任をしています。過労死ラインは超えています（笑）。それでも、個人的には仕事は楽しくさせていただいております。

§「あの日（３・１１）」のこと①

震災の時の話に戻って話したいと思います。この画像（右上）は私が勤務していた雄勝小学校です。屋上に家があるのは分かりますか。これ（丸く囲んである部分を参照）です。2 階建ての家屋です。3 月 12 日に撮影しました。石巻市の中でも北上川という川の河口にあり、海に面してリアス式海岸により豊かな漁場のあった地域の小学校に私は当時、勤務していました。108 名の小規模校。報道などでよく取り上げられる大川小学校は山を隔てた隣の学校になります。





こちら（右中）はバスが屋上にのっているのが分かりますか。人間の大きさがこれぐらいです。津波は地域一帯を覆いました。スーッとしたたかにのみ込んでいきました。泥水のような色でした。音はしませんでした。聞こえなかったのかもしれません。山の上から電柱が折れる音を聞き、ようやく大変な状況であることを認識したのでした。義理の祖母は「戦争のほうがまだましだ。警報で教えてくれるから」と話していたことを思い出します。



こちら（右下）は航空写真（Google マップより）。雄勝の町です。この形状が豊かな漁場をつくるのですが、震災の時には、津波は重なるのですね。水は重なって重なって津波の高さになっていきます。当時

は 6m と言われましたが、実際はもっと高かったのではないかと思います。

あの時、子どもたちは掃除をしていました。私は職員室で子どもたちに配付するプリントなどを確認していました。グラッと揺れました。突き上げられるような揺れでした。一昨日の 3 月 9 日も地震と津波警報があり、授業を短縮して集団下校させました。いま思うと、「地震」にも「津波警報」という言葉にも麻痺していたのかもしれません。（またか）という思いが私の中に巡っていました。その瞬間までは。しかし、次の瞬間に（この地震は何かが違う）と感じ、職員室から 2 階にある 5 年生教室に駆け上がりました。子どもたちは全員掃除中でしたので、教室後方に寄せてあった児童用の机の下にもぐっていました。

担任していた 5 年生は 12 名でした。私はまず、12 名全員の名前を呼びました。全員がいることを確かめると、次に、天井からはずれて、ぶら下がっている蛍光灯が、机の下にもぐっている子供たちの頭上にないかどうかを確認しました。その後、子どもたちに「よく聞きなさい。先生がみんなの命を必ず守るから、きちんと指示に従いなさい」と 2 回繰り返しました。「分かりましたね。」と言うと「はい」という返事がそろって聞こえました。そこに、生きようとする強い意志を感じました。私も「助けなければならない」という思いがこみ上げてきました。その間も揺れは続いています。窓ガラスは桟から外れ、飛散防止フィルムによってかろうじてブラブラと揺れていました。

避難訓練のマニュアルとして、その後、校内放送によってどの経路で避難するか連絡があるはずなのですが、なかなか連絡がありません。私は、この状況なのに放送を待っていました。（いつになったら連絡があるのだろう。揺れが収まるのを待っているのかな。どうなっているのだろう。）と、さすがに心配になりました。その間も私は泣きじゃくる 2 人の女の子のそばで「大丈夫だよ。」と声を掛けて背中をさすっています。

「揺れが収まったら合間を見て逃げてください」。下から駆け上がってきた安全主任の先生が伝えてくれました。その後、放送機器は教頭先生がスイッチを付けた時に、火花が散って使えなくなったことを知りました。確かにこの揺れですから、放送機器は壊れますよね。そんなことも気付かなかったのかと思います。今思うと、マニュアルをつくることを日頃より求められてばかりいる現場では、そのマニュアルが使用できない状況を想定する想像力と応用力が十分ではなかったのだと振り返ります。「想定外を想定する」。こうなったどうなる、ここに津波が来ないなんて絶対に言えるのか。こんな感じで、先生方で想定外を想定する取組を、石巻市ではどの学校でもしています。

§　実際の津波動画

小学校ではないですが、市役所の雄勝支所で撮影された津波の動画があるので、こちらを見ていただきたいと思います。石巻市雄勝町での映像です。町がどのように津波にのみ込まれたのかをご覧いただきたいと思います。9分間の動画です。早送りはしていません。一瞬のうちに津波にのみ込まれたことをぜひ分かっていただきたいと思います。津波を実際に見たことのある方はいらっしゃいますか。（会場の参加者に向かって）先生は盛岡では津波はなかったですね。あの日も雪が降っていたのですね。

（動画上映開始）動画上映中の解説は以下の通り

だんだんと海と道の境目がなくなってきます。

泳いで逃げればいいんじゃない。そんな話もありますが、イメージとしては洗濯機の中です。

家が流れているのがご覧いただけますか。実際に家が持ち上げられ、家ごと流され、また潮の流れで戻されて助かった方もいらっしゃいます。

これは役場の庁舎内ですが、3階まで波がどんどん上がってきているので避難していきます。雄勝の地域はこれまでに3回ほど津波を経験しています。そのたびごとに、（ここには津波が来なかったからここに家を建てよう）とした歴史があります。実は、それが足かせとなり、正常化バイアスになっていたという事実は否めません。自宅の2階や避難所と書かれているところに避難したから大丈夫ということではなく、（ここでは駄目だ）と自分で危機を感じて逃げた方が助かっています。自分で(危ない)と思って山に逃げた方。まさに一瞬の判断が生死を分けることも少なくなかったようです。

ここは役場の屋上です。この音はサイレンですね。こういう状況ですから、ほかの地域に「助けて」と呼ぶ方法もなく、雄勝はここから孤立していきます。

この黒い丸い物は養殖に使う牡蠣樽ですね。船や漁業に使う道なども一緒になっています。ここまででまだ6分です。先ほどの道路が見えていた時から6分で町がこのようになりました。

役場の皆さんは屋上ですが、ここでも危ないのではないかと、さらに隣接する山の上に上がって避難しています。役場の中庭も、もう水やがれきが迫ってきています。

多くの犠牲があったのが雄勝の病院でした。病院の入院患者さんを上に避難させることは非常に難しかったと聞いています。教え子たちは、この日は中学校の卒業式でした。中学校の卒業式に出席した看護師のお母さんは、娘の卒業式の姿を見て病院に戻ります。そして、患者さんを救うために尽力され、亡くなったそうです。

今でも私は、避難できそうな高いところが近くにないと緊張します。高いところがない道路で渋滞すると不安になってしまうのです。避難しようと渋滞する道路で車を捨てて逃げた人は助かった。一方で車の中で亡くなっていた方も多かったようです。

（動画上映終了）

§「あの日（３・１１）」のこと②

学校の裏から獣道を通って山頂で集まっていた子どもたちと地域の方々。消防団の方から山道を通ってクリーンセンターへに避難したほうが寒さをしのげるのではないかという提案があり、移動することにしました。山道は雪で覆われ、道路のひび割れや崖崩れ、余震もある状況の中での避難でした。雪もしんしんと降り続き、あたりも暗くなっていきます。地域がどうなってしまったのかを心配しながら、まず「生きること」､そして「命を守ること」だけを目的に歩いていきます。お昼寝中だった保育所の子どもたちも、寒い中を泣かないで歩いていました。健気な姿に励まされたものです。幸いにも私のポケットに入っていた携帯電話には「生きてる」というメッセージが妻からありました。出産予定日を翌月に控えた妻から届いていたこのメッセージは私の心の支えとなりました。しかしながら、私の返信は妻には届いておらず、妻は未亡人として出産する覚悟をしていたと後から聞きました。

クリーンセンターでは、暗くなる前に避難している児童の名簿と寝床をつくりました。寝床といっても、段ボールを床に敷き、その上に段ボールをかけるだけのものです。今日は家に帰ることができないことと、今日の食事はないことを子どもたちに伝えると、覚悟したような表情でしっかりと理解してくれました。その夜は、空腹を訴えた子はいませんでした。保育所の子もです。泣きもしません。しっかりとその一晩を静かに過ごしていました。何かを感じ取ったのでしょうね。駄々をこねる子もいませんでした。

屋根はあるものの、寒い夜でした。余震におびえる子どもたちに声を掛け、外ではたき火に当たりながら情報交換が行われました。幸いにも、クリーンセンターなので燃やす物はたくさんありました。ラジオから聞こえてくる情報は、南三陸町や女川町といった隣接する町の情報です。上空のヘリコプターに見えるようにたき火を見せるのですが、ヘリコプターはそのまま素通りしていきました。ラジオからは山火事が起こり、道が寸断され、逃げ場がないという地域の情報も流れてきているので、どこも大変なのだろうと思っていました。石巻や雄勝の情報が全く報道されないため、見捨てられ感が漂いました。卒業式を終えたばかりの中学生や中学校の

教職員は無事なのかどうか不安は広がります。長い夜でした。通信機器も流されていたことを後で知りました。

この状況ですから仕方がなかったのですが、不安を抱えた夜に寝つけない子どもたちは、翌週に歌う予定だった卒業式の歌を歌ったり、流行りの歌謡曲を歌ったりしていました。その時に流行っていたのではないですが、THE 虎舞竜の「ロード」を歌いながら、「何でもないようなことが幸せだったと思う」という歌った後に、（そうだよね。）とつぶやく姿が印象的でした。歌いながら励まし合っているようにも思えました。

§　３月１２日

翌日、山の上から町に下りると、町はこのように（右上）なっていました。そこはもう町というよりは、どこが道かも分かりません。

これは（右中）私の教室です。教室には浴槽がありました。浴槽の中にタコがいました。

私の車（右下）は学校の廊下にスポッと入っていました。ただし、この車の後ろには御遺体がありました。

こちらは（次頁右上）木の根っこがあるのが分かりますか。津波の高さを物語っています。雄勝のインフォメーションセンターという中心的な建物でした。

今度は NHK で 5 分ものの動画です。私が次の日にどのように避難したかというものをご覧いただければと思います。（下の QR コードで動画については視聴可能です。）







（動画上映開始）

10 年前なので、ちょっと若いですね。

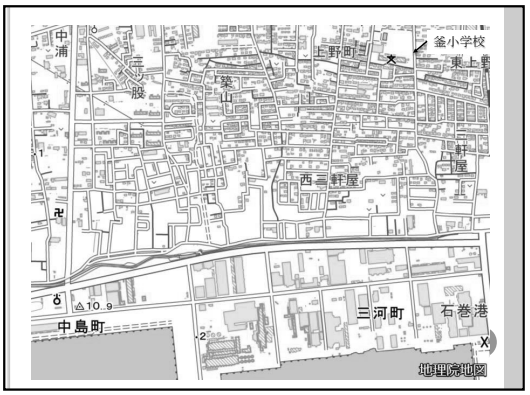
学校があったところはもう更地になっています。

（動画上映終了）

§　あれから

石巻市立釜小学校です。こちらも（右中上）海の近くになります。学校に入ると、1 階の柱に「津波ここまで」と書かれたテープが貼ってありました（右中下）。3 月 26 日、学校の校庭は泥というか、もうこのような状況（右下、次頁右上）になっています。段ボールで仕切られたこの体育館の避難所は、9 月ぐらいまでこのような状況（次頁右下）でした。子どもたちの声がない学校と子どもたちの声がある学校ではこんなに違うものなのかと改めて感じました。4 月末に遅れて始まった一学期。電気も使えない教室でした。それでも、教室から子どもたちの歌声が聞こえてきたときの感動は今でも覚えています。それまでは、避難所であり、津波のヘドロ掃除をしていたりした空間は、そこに子どもたちがいることで「教室」になるのだと感じました。









§　目に見えない心の傷

初任者研修の拠点校指導教員として、いろいろな学校を訪問することになります。そこでは、目に見えない心の傷をか

かえた子どもたちの姿が垣間見られました。その時には、アサガオの水やりをしていた１年生がジョウロから流れる水を見て、「アリにとっては津波だろうな」と話していました。また、夏は大量に発生したハエをたたきながら、その死骸を１カ所に集め、「遺体安置所」と呼んで遊ぶ２年生の姿。それがトラウマからの解放であることは理解しているものの、私たち教職員は戸惑ってしまいます。自分の感情を押し込め、刻み込まれた子どもたちの心の傷を心配しました。


2011/3/26
※出所　東日本大震災アーカイブ宮城（石巻市）
提供者　日本財団　コミュニケーション部


2011/5/11
※出所　東日本大震災アーカイブ宮城（石巻市）
提供者　みらいサポート石巻

「もう一度津波が来たらどこに逃げるのか」と休み時間に相談をしている４年生。確かに、通学路の両脇にはがれきが高く積み重ねられています。登下校中に津波が来た場合は安全な場所に避難することになっているものの、どこが安全なのかが分からず、大人の私たちも困惑したものでした。雪が降ると「わー、雪だ」と言って喜ぶ子どもたちがいる一方で、あの日を思い出し、母親と離れられなくなる３年生もいました。

亡くなった妹の写真を机の上に置いて給食を食べている女の子がいました。どうしたのだろうと担任の先生に聞いたところ、大好きな妹の遺体を発見したのが彼女でした。「妹も給食を食べたいだろうから。」と話していました。一晩中、水に浸かっていたところを助けられた低学年の男の子は、お風呂に入るのを嫌がったそうです。水泳学習では配慮が必要になったでしょう。どの学校にも避難訓練に参加できないでいる子がいました。

６月の夜に私の携帯電話が鳴りました。ある保護者からです。住む部屋が見付かったとの知らせでしたが、仮設住宅に入れずにいる方々に聞かれることを配慮して自分の車の中から掛けてくださいました。避難所では、夜のスリッパの音で眠れず、トイレに行くのにも気を遣う生活だったと伺いました。また、「暇だから漢字練習しちゃった。」と話す息子の姿に涙が出たとも話していました。いろいろな不安を抱えながら避難所生活をされていたのだと思いました。

釜小学校の当時の５年生はこんな作文を書いています。「私たちは生き残った者として、亡くなった方々の分まで楽しいことをしたり、頑張ったりするのが生き残った者の役目だと思います。くよくよして下を向いても何もいいことはありません。必ず明日はやってきます。明日は来ます。何事も一番大事なのは未来を信じることです。信じることをやめたらそこで止まります」。この作文を読んだ時に、なんだか大人が喜びそうな作文を綴っているのではないかという思いもありました。この文章をどのように受け止めればよいのか迷いましたので、担任の先生の協力を得て、インタビューを実施しました。すると、「震災のことを忘れてはいけないと思うし、伝えないといけないと感じている。ずっと下を向いていても始まらないと思います。」「泣いたからといって亡くなった友達が帰ってこない。」「震災前と後を比べると大人の人は弱くなっているように感じます。今までは強いと思っていたのに本当は弱いのだなと思いました。そして、大人は力を出せなくなっていると思います。」「大人も頑張っているけれど、泣くのは分かります。でも、あまり泣いていても駄目だと思います。」「子どもから発信して大人を元気にしていきたいと思います」。こういう言葉が出てきました。この聞き取りを通して、子供たちが前を向いて進もうとしていることを感じました。悲しいという気持ちを受け入れ、自宅が壊れてしまったという現実も受け入れているのです。話を聞きながら、綴られている言葉を疑ってしまった自分自身を恥ずかしいと思いました。ただ一方で、自分の感情に蓋をしている子どもたちがいるのも事実です。

◆5年女児の自主勉強での作文…C小学校

「……私たちは，生き残った者として，亡くなった方々の分まで楽しいことをしたり，がんばるのが生き残った者の役目だと思います。くよくよして，下をむいても，なにもいいことがありません。必ず明日は来ます。何事も一番大事なのは〈未来を信じる〉ことです。信じることをやめたら，そこで止まります。……」

▽大人が喜びそうな作文を綴っているのではないか。

▽担任教師の協力を得て，インタビューを実施。

半構造化面接による聞き取り

①未来に向かって進んでいこうと考えようと思った契機は何か。

②どんな6年生，どんなC小学校に，どんな〈石巻〉になりたいのか。

◆聞き取った内容から

（対象児童：同じような作文を書いた5名の児童）

「震災のことを忘れてはいけないと思うし，伝えないといけないと感じています。ずっと下を向いていても始まらないと思います。」

「泣いたからといって，亡くなった友達は帰ってこないから」

「震災前と後を比べると，大人の人は弱くなっているように感じます。今までは強いと思っていたのに，本当は弱いんだなあと思いました。そして，大人は力を出せなくなっていると思います。」

「大人もがんばっているけれど，泣くのも分かります。でもあんまり泣いていてもダメだと思います。」

「子どもから発信して，大人を元気にしていきたいと思います。」

（内容の一部中略）

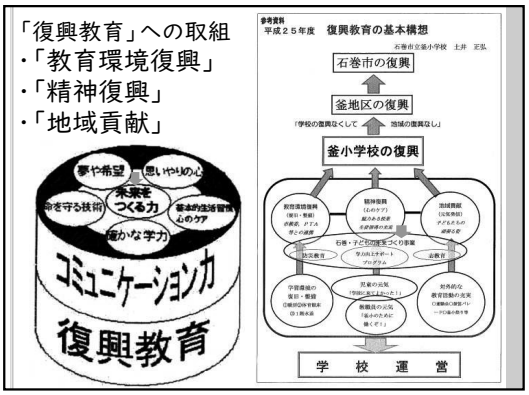
§　復興教育の取組

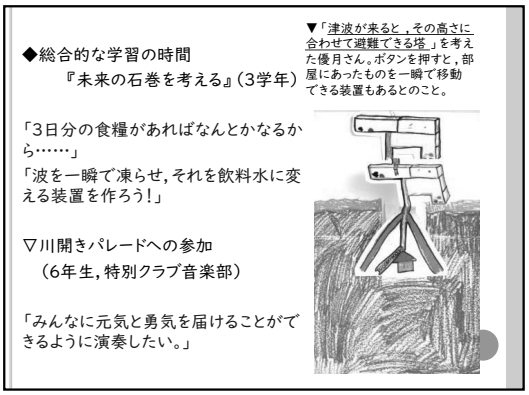
釜小学校では「復興教育」を掲げて、自分たちの地域を復興していくために「教育環境復興」「精神復興」「地域貢献」の三つを軸にして、子どもたちの「未来をつくる力」を育てていこうと考えました。いろいろな取組をしています。

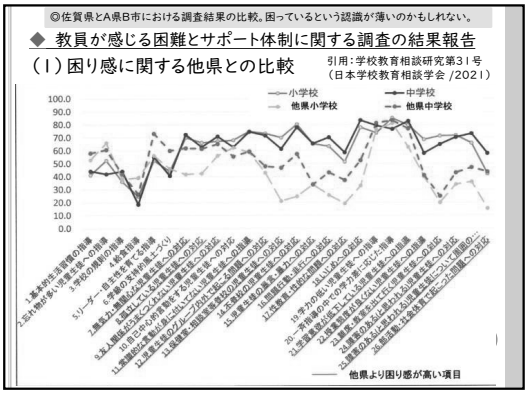
3年生の総合的な学習の時間では、未来の石巻について考えました。津波が来るとその高さに合わせて避難できる塔を考えるなど、いろいろな子どもらしい現実離れした発想がたくさんありました。それでも、例えば3日分の食料があれば何とかなるかとか、波を一瞬で凍らせ、それを飲料水に変える装置をつくろうとか、その言葉の根底に流れているものは、経験に裏付けられた発言だったと私たちは思います。ですから、出てくるイメージは本当にとっぴなものではありましたが、子どもたちが真剣に考えている姿が見られました。

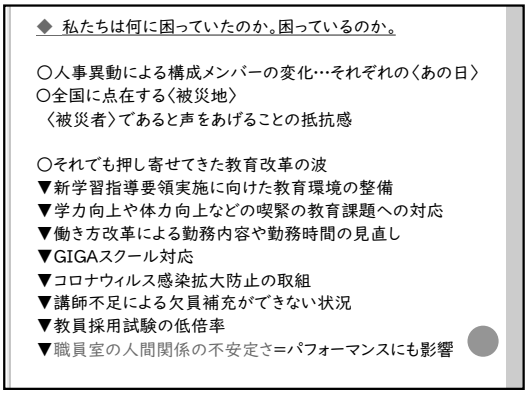
§　教師は何に困っていたのだろうか

では、先生方はどうでしょう。金子先生と一緒に日本学校教育相談学会で研究している内容の一部を紹介します。「教師の困り感」については論文にも書いてありますが、実際に被災地の先生方が困っているデータがあります。（右中下）これは被災地であるA県B市ですが、先生方は困っているという認識がないのですね。（困っていると思ってはいけない。）（頑張





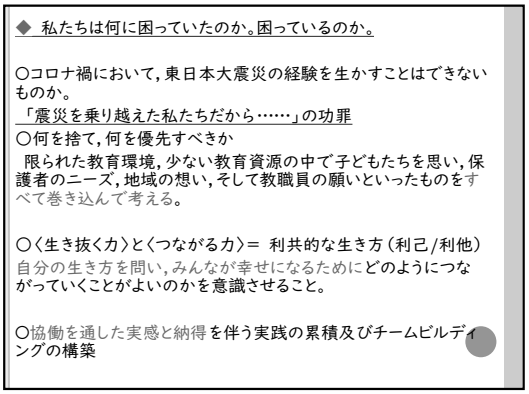




らなければ……。）そうやってバーンアウトしていく現実がありました。

実はその先生たちも被災者であり、家族を亡くしていたり、家が流されたり、いろいろなことがありました。そんな中で困っているなんて言えない現場の状況。また、子どもたちの荒れの対応。例えば愛着の問題とか、不安から来る暴力行為とか、席に落ち着いて座っていられないとか、こういう問題への対応でかなり疲弊していたことが調査結果から浮かび上がってきました。

釜小学校には兵庫県の学校から冷蔵庫が送られました。100円ずつハンカチで手品の道具をつくり、阪神淡路大震災を経験された兵庫の先生方が県内の先生に売って冷蔵庫の代金を集め、そして寄付をしていただきました。「先生たち、疲れないでね。お菓子食べてね。」とお菓子を送ってくださる地域の先生方もいました。兵庫や全国からのそういう支援に先生方も救われたことが多かったです。



先生たちは何に困っていたのか。これ（前頁右下）が全てではないですが、私たちはこんなことを考えていました。人事異動による構成メンバーの変化。「あの日」「あの津波」と言っても、異動によりもうイメージが共有できなくて、それぞれの「あの日」になっている。また、その後も熊本や広島、いろいろなところで災害が起きました。私たちだけが被災地ではない。そして、いろいろな支援も3年をめどに引き揚げていきます。支援が必要であると声を上げることへの抵抗感も感じました。そろそろ自立しなければいけないのではないかと、自分で思い込んでいるケースもありました。

そして、さらに押し寄せてきた教育改革。新学習指導要領の実施と教育環境の整備、学力向上、体力向上、働き方改革、GIGAスクールの対応、コロナウイルスの感染拡大防止の取組、教員不足、教員採用試験の低倍率、職員室の人間関係の不安定さ。この辺りは教職員のチームとしてのパフォーマンスにも影響していきます。どれも大切な教育改革ですが、職員室を疲弊させていったことも事実です。

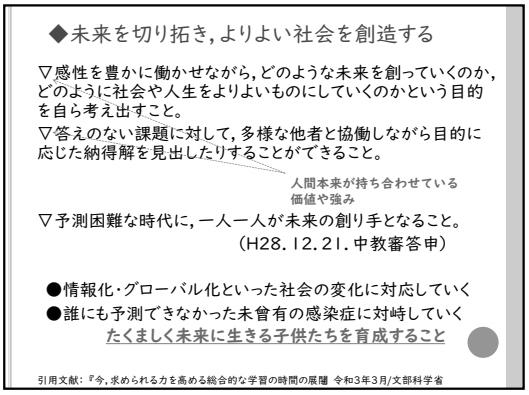
また、こんなことも話として出ています。コロナ禍において、震災を乗り越えた私たちだから、東日本大震災の経験を生かすことはできないだろうか。この言葉が、実際に震災を乗り越えたから頑張ろう、というようなメッセージになってしまい、弱音が吐けない現場になっていることもありました。それが先生方のメンタルの疲れにもつながっていくのかもしれません。

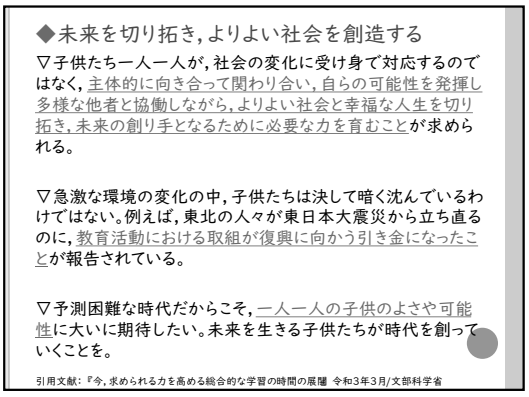
何をして、何を優先すべきか。限られた教育環境と少ない教育資源の中で子どもたちを思い、保護者のニーズ、地域の思い、そして教職員の願いを全て巻き込んで考えていく必要があるだろうと思います。「生き抜く力」と「つながる力」を大切にしながら、利共的（利己的と利他的）、それを含めた生き方。つまり、自分の生き方を問い、みんなが幸せになるために、どのようにつながっていくのがよいのか。こういうことを意識させる教育をしていかなければいけないよね。そんな話になりました。協働を通した実感と納得がないと、先生方はどんないいことをしていても何か疲れてしまう。そういうことってあるよね。そんな話題にもなっています。

§　総合的な学習の時間の取組

さて、実際に総合的な学習の時間ではどんなことに取り組んでいったか。これからは総合的な学習の時間で、私たちが取り組んだ内容について紹介したいと思います。

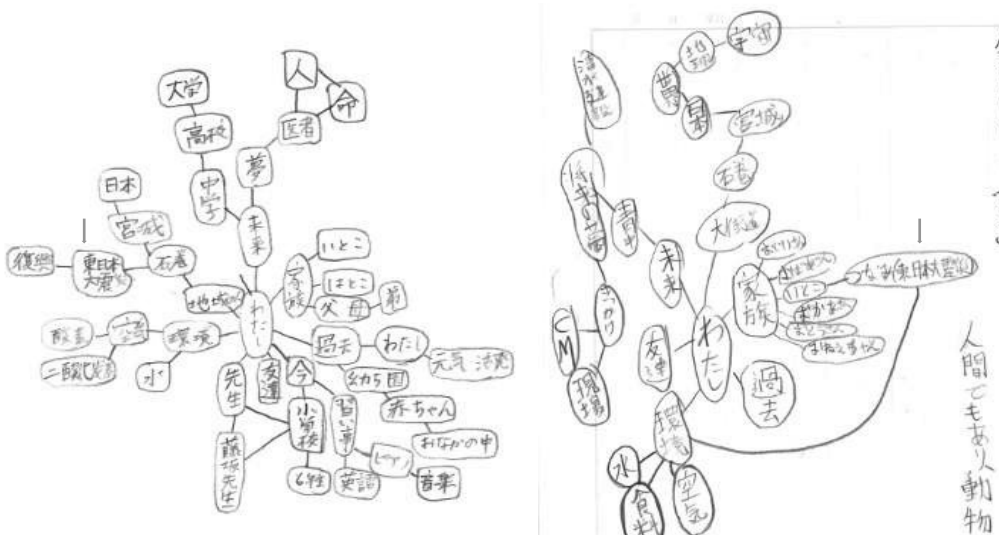
まずは文科省の資料からですが、総合的な学習の時間については情報化・グローバル化という社会の変化に対応していくこと。誰も予測できなかった未曽有の感染症に対峙していくたくましく未来に生きる子どもたちを育成すること。これを大切にすると提示されています。（右上）





そして、ここ（右下）です。急激な環境の変化の中、子どもたちは決して暗く沈んでいるわけではない。例えば、東北の人々が東日本大震災から立ち直るのに、教育活動における取組が復興に向かう引き金になったことが報告されている。震災から立ち直るいろいろな取組をしていたことが、伝わっていることを感じました。いろいろな学校でいろいろな取組をしている。その中で、私たちが取り組んだことについてお伝えしたいと思います。

◆防災教育 × 国語科



『生き物はつながりの中に』（中村桂子・光村図書６年）……国語科

▽生き物としてつながりに気付かせ，筆者の考えに対して自分の考えを持たせたいと考えた。教材文と絵本『私はひろがる』（岸武雄・作/長谷川知子・絵）を関連させて自分の考えを書く活動を設定した。

まず、防災教育×国語科。6年生は「生き物はつながりの中に」という文章を読み、卒業の前にこうやってイメージマップ私から世界が広がっていくという、私は広がっていくのだというイメージを持たせたところ、小学校に入る前の５歳のころに被災したこの子たちですが、イメージマップの中に「東日本大震災」と出てくるのですね。ほとんどの子たちが「津波」や「復興」というワードが出てきます。

イメージマップを広げて作文を書かせると、このように。（右下）赤線のところを読みます。「価値のない生き物がいないように。今この瞬間に存在していることがどれだけ意味があることなのか考えを深めること」。「自分だけが幸せではなくみんなが幸せになるように、ほかの命や存在も大事であることを常に意識していく。大切に生きていきたい」。このような認識の変容が見られました。

◆防災教育 × 国語科

▽私は，今まで「自分は」と言って自分を中心とした考え方しかなかったけれど，「生き物はつながりの中に」を読んで，自分だけじゃないということを考えることができました。友達や家族，動物，植物とも，この地球のすべての生き物とどこかでつながっていると思うと，ロボットなどの機械より，生き物がどれだけすばらしいものなのか，そして価値のない生き物がいないように，今この瞬間に存在していることがどれだけ意味のあることなのか，考えを深めることができました。（A子）

▽自分自身だけを考えるんじゃなく，絵本「わたしはひろがる」と「生き物はつながりの中に」を関連させながら読んで，周りのことを考える大切さを改めて感じました。社会科の学習を通して，飢えや病気で困っている人を見て見ぬふりをするんじゃなくて，助け合うことが大切だと学びました。国語科では，人物や人の気持ちを考える大切さとこの教材文から，生きているたった一つのかけがえのない命があるだけで，自分や仲間たちと楽しく幸せに暮らせるということ，そして一つの命を大切にしたいと思いました。自分だけが幸せじゃなくて，みんなが幸せになるように，他の命や存在も大事であることを常に意識して，大切に生きていきたいです。（B男）

◆「復興防災マップづくり」[3年生]



また、復興・防災マップといって復興や防災に関する情報をマップにまとめる取組を石巻市は行っておりますが、釜小学校では2年生から5～6年生まで、いろいろな活動を通してマップにまとめてみました。2年生の生活科、それから3年生の防災学習、4年生は伊達政宗の時代の人ですが、地域の川の氾濫を抑えるための工事をした「川村孫兵衛」の業績、そして5～6年生はSDGs、これらを関連させ、学習をデザインしていきました。

特に3年生の防災学習についてお伝えしたいと思います。今は5年生になっている子たちです。この子たちは震災の時に生まれた学年になります。まず屋上から学校の周辺を観察しました。これは(右上)社会科の学習でもあります。それから、

◆「復興防災マップづくり」[3年生]
①屋上から,学区を見てみる。



◆「復興防災マップづくり」[3年生]
②学区を歩いてみる。……津波避難ビルへの気付き



学校を歩いてみると、津波避難ビルがどこにあるのかさっぱり分からなかったという事実があり、指導者チームはかなり衝撃を受けました。子どもたちは下しか見ていないということに後で気付きました。

実際に、震災伝承の会の方々に来ていただき、震災の時の話を聞きますが、ここで分かったのが、子どもたちは意外と震災のことを家族で話していないということです。聞くのもタブー、話すのもタブー、そんな印象でした。南海トラフ巨大地震などの情報を知りたがっている子どもたちが多く、質問が結構出てきました。自分たちの地域の防災について、実は子どもたちは、関心は高いけれども、何か聞いてはいけない。そんな雰囲気があったのかもしれません。ここでの学びを次の探究課題に続けていきます。震災伝承の会の人たちは防災士の方も多く、そのチームの皆さんに協力をいただきながら町を探検していきます。津波が来たらどこに逃げるか、実際にここではどんな被害があったのか。そんなことを子どもたちは話を聞いたり、実際に見たりして考えていきます。

◆「復興防災マップづくり」[3年生]
③「石巻震災伝承の会」の方々との学習
……津波避難ビルを探そう。



[児童と指導者チームの振り返り]
▽避難したときに私たちができることは何か？
→次の探究課題へ





◆「復興防災マップづくり」[3年生]
③「石巻震災伝承の会」の方々との学習
……防災グッズを作ろう。





◆「復興防災マップづくり」[3年生]
④消防署，河北新報出前講座 ……社会科や国語科と関連させて



※キャリア教育との関連させながら

◆「復興防災マップづくり」[3年生]



震災から10年　防災教育に力

2021年は東日本大震災から10年を迎える。いつどんな災害が起きるのか分からない中、石巻地方の学校は子どもたちの命をするため、どのような防災教育をしているのか、各校の取り組みの一部を紹介する。

釜小

学区内歩き場所確認



2020年（令和2年）9月9日（水曜日）

震災体験 真剣に傾聴

石巻

釜小3年 防災学習

避難方法や備え学ぶ

また、避難所生活についても考えました。（前頁右中）子どもたちは遊んでいるように見えますが、ゴミ袋で暖を取るために服をつくったり、スリッパや靴をつくったりしていきます。（6年生は段ボールでトイレをつくりました。）ただ、今は防災備蓄倉庫にいろいろなものがあるので問題はないですが、実際に避難所でどのような工夫が必要かという視点も育てていく必要があると感じています。消防署や新聞社の方々にも協力していただき、学びを広げました。（前頁右下）

新聞やメディアなどでも取り上げていただき、震災学習は10年目を経て「いろいろなことをやっているのだよ、大切だから見直そうね。」このようにメッセージ

◆未来の石巻を考える ～SDGsを学びながら～

▽石巻市SDGs推進室に電話をしてみる。(まだ, SDGs未来都市に選定される前だった。)出前講座をすぐに依頼してみる。→OK

▽一緒に何ができるのかを考えていくことに。

17 パートナーシップで目標を達成しよう



石巻市

SDGs未来都市選定

先進技術で課題解決へ

県内初 自治体モデル事業にも

◆未来の石巻を考える ～SDGsを学びながら～

▽総合的な学習の時間のおおまかな流れ（5･6年/2020年/釜小学校）

4･5月（休校）
6月 出前講座Ⅰ（石巻市 復興政策部 SDGs地域戦略推進室）
6月 出前講座Ⅱ（石巻日日新聞 石森さん）…石巻観光リーフレットづくり
6月 出前講座Ⅲ（サステナブルデザイン工房）……おかえりブロック（環境）
7月 出前講座Ⅳ（子どもセンターらいつ 吉川さん）……SDGs基礎講座
7月 パンフレットづくり/防災に関するポスターづくり
9月 出前講座Ⅴ（アラブの子どもと仲良くする会 西村さん）…紙漉き体験
9月 出前講座Ⅵ（子どもセンターらいつ 吉川さん）……SDGs調査活動
10月 SDGsに関する意見文づくり ……国語科（サステナブルデザイン工房）
10月 SGDsに関する取組の企画書をグループごとに作成
11月 出前講座Ⅶ（アラブの子どもと仲良くする会 西村さん）
アラブ地域の子どもたちとの交流 …ZOOM
11月 出前講座Ⅷ（サステナブルデザイン工房/花王）
おかえりブロックの製造工程についての説明及び交流…ZOOM
11月～2月 SDGsに関する取組の企画プレゼン及び検討 → 実践へ
2月 出前講座Ⅸ（サステナブルデザイン工房/ラジオ石巻）……ラジオ収録
2月 SDGs親子ワークショップ
2月 レポート作成 及び 活動の振り返り

を発信することもできました。（前頁新聞記事）

その後、石巻市はSDGsの推進都市に推薦されます。私たちの学習もSDGsとどんどん関連させていこう。そんなことを考えていきました。ただし、コロナがここで流行して、学校は2カ月間の休校となってしまいます。

学びを止めない。先生たちはそんな思いで、（外に出ることができないなら実際にいろいろな人たちを学校に招いてしまおう。）と考え、学習プログラムをつくりました。サステナブルデザイン工房というNPOの皆さんは、洗剤などの詰め替え袋をリサイクルして「おかえりブロック」というブロックをつくる活動をされています。（右上）今後は水平リサイクルに展開を変えていきますが、当時はプラスチックを集めるとブロックになり、そのブロックが避難所のパーテーションやベッドや椅子に変わる、またはつくり変えることができるということで、防災グッズとしても活用されました。

紙すき体験。（右中上）こちらは国際理解教育と国際貢献の活動です。実は北上川の近くにヨシという植物がたくさん生えていて、そのヨシの線維を使って紙すきを教えてくださる西村さんという方がいらっしゃいました。この西村さんはアラブの子どもたちを支援する会にも参加されています。資料の後ろにカレンダーの注文の紙があると思いますが、そちらに詳しく書いてあります。

◆サステナブルデザイン工房と「おかえりブロック」



◆ 紙すき体験と国際理解教育/国際貢献活動



◆ 紙すき体験と国際理解教育/国際貢献活動

▽身近な地域→石巻市内→世界へと児童の視野を広げていく学習の流れ
▽北上川のヨシを活用して漉いた紙は「カレンダー」に加工して販売
▽実際に支援先のアラブ地域のご家族との交流へ
▽カレンダーの絵と文字……アラブ地域の子ども
　カレンダーの刺繍……アラブ地域のお母さんたち
　カレンダーの題字としおりの手漉き葦紙 …釜小



◆ 藍染体験と国際理解教育/国際貢献活動

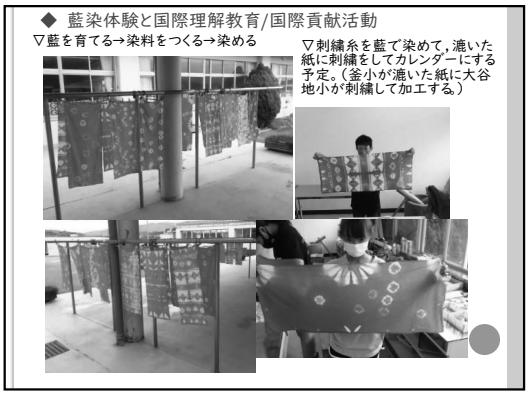
▽藍を育てる→染料をつくる→染める



実際に紛争や、ウクライナもそうですが、子どもたちの学習がきちんと保障されていない地域の支援をされている方で、カレンダーを売ったその売上金で子どもたちに支援に取り組まれています。子どもたちは紙すきをしながら、アラブの子どもたちが絵を描いたり刺しゅうをしたりして共同制作でカレンダーをつくりました。紙をすく私たち、絵を描く子どもたち、刺しゅうはアラブのお母さんたちというようにして共同でカレンダーをつくりました。こちらの画像（前頁右中下）には、オンラインでアラブの子どもたちと交流をする姿を映しています。実際にオンラインで交流することができました。

大谷地小学校ではさらにこれに加え、藍を育てて染料をつくりました。藍染めをして、こんな感じ（右上）です。この染めたものを今度は小物として地域の方につくっていただき、それも支援として販売していただく。こういう取組を子どもたちだけでなく、今度は地域や保護者の皆さんにも広げていこうということで、参観日などにこのように発表会をしたり、一緒に染めたりしました。こちらは草木染めになります。マリーゴールドで染めています。

防災学習については先ほども申し上げました震災伝承の会の皆さんの協力をいただき、実際に津波を体験する学習に取り組んでいます。体験するといってもイメージでですが、どこに逃げたらいいだろう、どのように行動したらいいだろう









ということを考えるプログラムにも挑戦しています。そんな感じで、マップに子どもたちの取組をまとめ、復興・防災マップは完成しました。いろいろな取組が集約された形になっていきます。

大谷地小学校はここ（右上）にあるのですね。田んぼの活動も多いですが、ここでの問題は洪水。洪水の時にどこに逃げたらいいのだろう。そんな問題が出てきました。山まで逃げると歩いて 30 分かかります。ただし、校舎には屋上がありません。太陽の光がさんさんと降り注ぐおしゃれな構造になっていますが、実際に屋上には逃げられない。洪水で 5m、水が来たときの逃げ場として、山に逃げるか、学校の 2 階にとどまるか。どちらがいいのだろう。でも、校舎にとどまったときに危険は回避できないだろう。そんな問題にも取り組みました。こちらに動画があります。



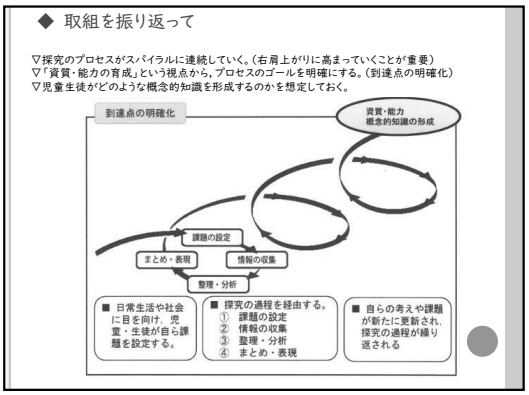


（動画上映）

※東北大学の先生を外部講師としてお招きし、浸水被害における適切な判断や行動について考える授業を取材していただいたときのニュース動画を紹介しました。

（動画終了）

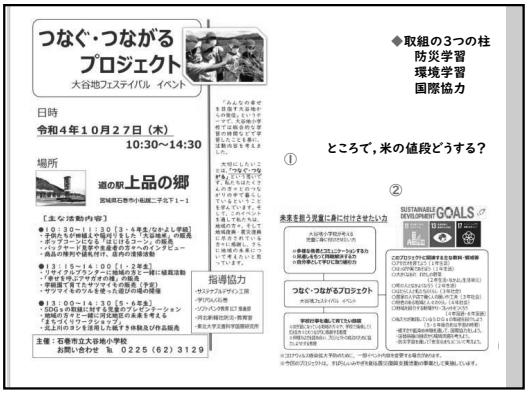
さまざまな取組について、石巻の SDGs のシンポジウムで発表させていただいたり、市報に掲載していただいたりしました。ショッピングモールで展示する取組にも協力しています。こんな感じで、総合的な学習の時間の中で、スパイラルな取組をどんどん継続していくなかで、子どもたちの資質・能力、それから防災も含め、いろいろな情報を身に付けることができたのではないかと考えています。さらに、その身に付けた情報や能力をどう生かしていくかという視点で、このスパイラルをつなげていく必要があるだろうと思います。

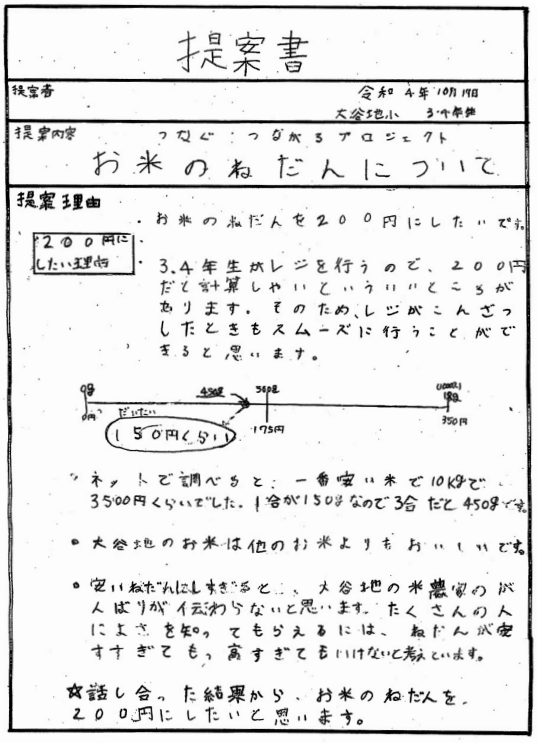


総合的な学習の時間は5～6年生で行っ

ています。たいがいの問題解決は１周、２周ぐらいで終わってしまいますが、５～６年生で行うことにより、その課題はつながっていく。２年のスパイラルで繰り返し発展していくのではないかと期待して、今は実践を進めているところです。

§　学びをつなぐ・学びがつながる



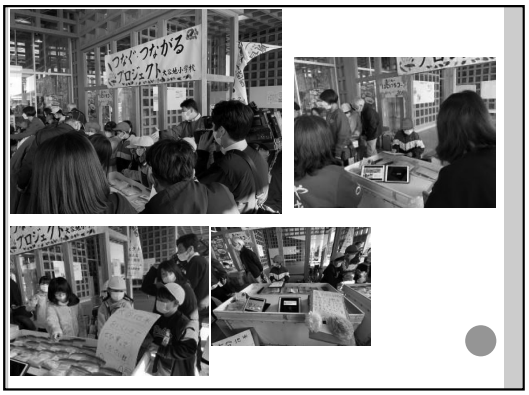


さらに、今年は新しい取組として「つなぐ・つながるプロジェクト」に取り組みました。いつもにぎわっている道の駅「上品の郷」を会場にしていろいろなイベントを行ったわけですが、学校での学びを今度は地域の皆さんに紹介していく。まちづくりを一緒に考えていただこうと思いました。実は「上品の郷」の前には二子地区というコミュニティがあり、それは震災の後にできたコミュニティです。家を失くしたり、家を流されたり、またはいろいろな状況で震災の影響で新しく形成されたコミュニティの皆さんと一緒にまちづくりを考えていこう。そんなことを考えました。

「つなぐ・つながる」は、自分たちの生活、または自分たちはいろいろな人とつながっていることを実感し、そしてこれからもそのつながりを大切にして生かされていくことを感じるようなイベントをしていきたい。教職員全体でそのように考えました。取組の三つの柱は防災学習、環境教育、国際協力です。

育てた米（田植えと稲刈りをうちの学校は学校行事で取り組んでいます。）そこでとれた米を売りますが、米の値段はどうするかという話題で子どもたちはすごく悩みました。なぜかというと、彼らにとって米はもらうものであり、つくるもの

であり、買うものではなかったからです。値段の相場はどこだろう。そんなことを、インターネットを活用しながら子どもたちは議論をします。校長室に直談判する動画はこの後ご覧いただきますが、3合200円という値段を設定しました。彼らにとっては少しだけ高いそうです。安いと大谷地の米のブランドが、つくっている方々の苦労が伝わらないからということで、数直線などを用いて提案書を印刷して校長室で提案していました。（前頁右下）





値段を設定して米を売るところ、またはソフトバンクの方と協力して宣伝動画をつくり、タブレットを見せながら実際に米を売ったりしているところは、こんな感じになります。低学年の子はサツマイモのつるで輪投げをつくり10円とか20円とか、そんな感じで販売します。偶然、ベガルタ仙台というサッカーチームの関係者が最後の米を買ってくれたのですね。そして、みんなでありがとうと言ったら、次の日にサッカーボールが6個届くという出来事もありました。こちらは米を売っている写真ですが、ここに本物のお金もちゃんとあります。

5～6年生は町の人と一緒にまちづくりのSDGsに関する自分のテーマ、調べたものを発表して、一緒にまちづくりを考えるという時間を設定しました。中には議員さんや大学の先生も入り、コメントしてくださいました。

（動画上映開始）

※「つなぐ・つながるプロジェクト」の取組のダイジェスト版を上映した。当日の様子のみならず、準備の様子なども含む。米の値段について校長室で交渉する4年生の姿も収めている。5・6年生のワークショップでは、タブレット端末を活用することで屋外でもプレゼンを効果的に行うことができた様子を紹介させていただいた。

（動画上映終了）

今どきの子はサッとつくり､それをやりとりしてしまうのですね。テレビやラジオ、新聞などの取材も入っていました。

これらの取組を今年まとめたところ、環境省のグッドライフアワードの特別賞を受賞することができました。実際に市長と会って受賞の報告をすることで、子どもたちはさらにやる気を増しているようです。三学期は、近くの小学校との交流、来週は山形県の天童市の小学校との交流。オンラインでの交流を通して実際にどんなコラボレーションができるか、どんなまちづくりができるか。そんなことを考えているところです。

今年の復興・防災マップはこんな感じになりました。「つなぐ･つながるプロジェクト」を中心にマップをまとめていきます。ここは学区の危険箇所を子どもたちが調べていったりします。その年により、いろいろな取組でマップの形が変わっていきますが、私たちの学校はSDGsでまとめていることが特徴です。





令和４年度　復興・防災マップ作品

さらにつながっていきます。学びは６年生の「町の未来をえがこう」。こちらの取組も先ほど申し上げたとおり、隣の学校との交流につながっていきます。

石巻市が主催している SDGs シンポジウム。こちらは釜小の動画です。本当は釜小でやった取組を子どもたちが発表する予定だったのですが、事情により私が代わりに話しています。

（動画開始）

石巻市の HP 内に「令和２年度石巻市 SDGs シンポジウム」で検索すると、動画を視聴することができます。

藤坂　本来でしたら子どもたちによる発表を予定していましたが、この収録をしている現在は臨時休校中のため、代わって総合的な学習の時間を担当している釜小学校の藤坂が発表させていただきます。よろしくお願いします。

改めまして、ご参加の皆さん、こんにちは。私たちは総合的な学習の時間に SDGs を学びながら、「未来の石巻を考える」というテーマで探究活動に取り組みました。SDGs 推進室の皆さんにゲストとしておいでいただき、話を伺うことから、私たちの学びは始まりました。２年生と３年生は町探検を通して、地域のよさや地域防災についてマップにまとめました。４年生は学区と関わりの深い川村孫兵衛と北上川改修工事について探求し、復興・防災マップにまとめました。

復興という視点で５～６年生が取り組んだのが「SDGs の輪を広める大切さを訴えていく」ということです。復興とは自分たちが住んでいるところだけが幸せになればよいのではなく、みんなが幸せを感じる社会をつくっていくことが大切ではないかと思います。はじめに紹介させていただくのは、詰め替え容器の回収を通して環境問題を考える取組です。サステナブルデザイン工房の皆さんとの交流を通して、家庭用洗剤やシャンプーなどの詰め替え容器を再生し、「おかえりブロック」にする新しいリサイクルの活動を学びました。

「おかえりブロック」はブロックとしても活用できますが、例えば避難所になったときには椅子やベッド､パーテーションなどに姿を変えることができます。ですから、これは防災グッズとも言うことができます。ゴミを捨てずに海洋プラスチックゴミを削減しながら、自分たちの暮らしに役立つものに再生する取組に私たちも参加しています。環境問題に取り組む子どもたちのチームは、このような回収ボックスを作成して校舎内に置きました。

全校児童に分かりやすいチラシを作成したり、それぞれの教室で「おかえりブロック」を説明して協力を呼びかけたりしました。また、地域の皆さんにも回収に協力

していただけるように交渉しているところです。また、回収した容器の重さに応じてポイントとなります。そのポイントを活用して学校図書館の補助を購入することもできるシステムになっており、先日、贈呈式が行われました。サステナブルデザイン工房の押切さんは、東日本大震災後にがれき処理のボランティアに参加されたことがきっかけで、この取組を始めたことを教えてくださいました。また、押切さんも関わっているラジオ番組の収録にも参加させていただきました。その番組の中で子どもたちの取組を紹介させていただきました。

次に、北上川のヨシを活用した紙すき体験から国際協力を考える取組です。「アラブの子どもたちと仲良くする」からの西村さんとの出会いにより、北上川のヨシを利用した紙すき体験を本校3年生から6年生までが体験をし、その後にイラクの子どもたちの暮らしの様子を学びました。戦争や紛争はどこか昔のことのように思っていたのですが、各地で起きている現実に驚きました。

西村さんもまた、東日本大震災をきっかけとして石巻での活動に取り組まれたそうです。以前よりアラブ支援を行っていた西村さんは、震災の時に「私たちのことよりも東北の人たちのことを支援してあげて」と言われたことで、石巻に移住することを決意したそうです。震災から10年を経て、今度は石巻の子どもたちがアラブの子どもたちを支援したいと思いました。

秋にはオンラインでイラクのご家族とつながり交流しました。やはりイラクでもコロナウイルスの影響で学校が休校になったり、外出禁止の時期があったりしたそうです。今でも続いているようです。それでも、日本の文化にとても興味があるそうで、子どもたち同士が質問し合いながら、自分たちの共通する部分があると、とても盛り上がっていました。子どもたちがすいた紙はカレンダーづくりに活用していただきました。その収益はアラブの子どもたちの教育支援に活用されます。今年は売れ行きがとてもよく、さらに紙すきプロジェクトチームの子どもたちは休み時間に紙すきイベントを全校児童に対して行い、カレンダーづくりに今も協力しているところです。

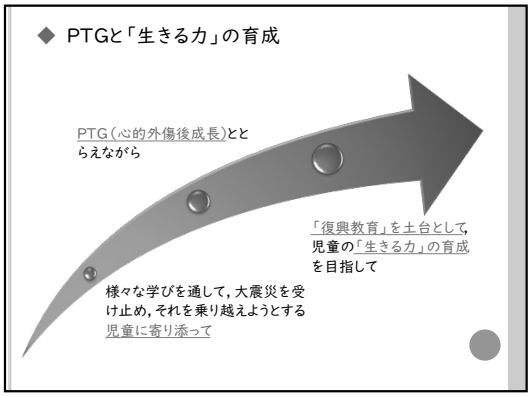
子どもたちは学びを広げるために、さらにいろいろな取組を始めています。コロナウイルス感染拡大防止のために大きなイベントを実施することはできませんでしたが、整理券を発行したり下級生の教室に足を運んだりして、小さなイベントを休み時間ごとに開催しています。また、給食の時間には校内放送を活用して自分たちの学びを全校に広めています。

6年生の児童の1人は次のように学びを振り返ります。「私たちは、2030年までの選択が、その後の地球環境や私たちの生活にどのような影響を及ぼすのかを学びました。世界中の人たちの意識を変えていかなければいけないと思います。そのため

には、まず私たち自身から変わらなければならないし、少しでも多くの人にSDGsの考え方を知ってもらうことが大切だと考えています。私も世界を変えるのだという気持ちで、普段の生活の見直しから始めたいと思います。」

これで釜小学校の発表を終わります。ありがとうございました。

（動画終了）



本当は子どもたちが話す予定だったのですが、休校になってしまったものですから、代わりに私が話した次第です。

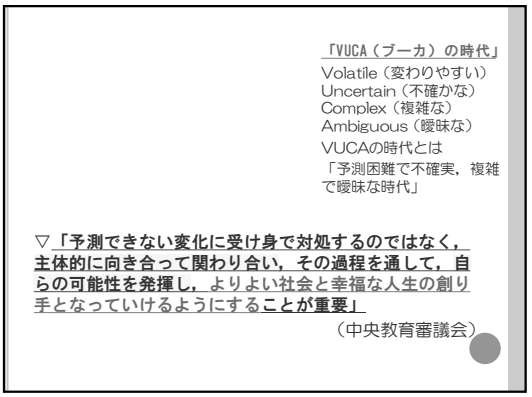
実は、いろいろな取組をする中でそのルーツを探っていくと「震災」というところにたどり着きます。震災を縁にして、そこから西村さんや押切さん、いろいろな方々との出会いが学びにつながっていくことに子どもたちは気付きます。自分たちのつながり、自分といろいろなつながりの中で自分は生かされているのだと新たに確認をしながら、そして、そのつながりを今度はどのように生かしていこう。このつながりをさらに活用して、よりよい世界をつくるために、どのように自分が行動していけばいいのか。そんなことを考える場が「学校」であってほしいと思います。

震災から今まで、ざっと12年を少し早口でお話しさせていただきましたが、実際にこのように捉えることができるのではないかと思います。（右図）まずは学びを通して大震災を受け止め、それを乗り越えようとする児童に寄り添っている段階から、それをPTSDの言葉の逆に当たるPost-Traumatic Growth（心的外傷後成長）と捉え、子どもたちの生きる力の育成を目指している。これが私たちの今になっています。

寄り添い、心的外傷も成長の糧とし、さらに生きる力を育てていく。いま実践を振り返り、そういうところなのかと、自分の中では意味付けているところです。VUCAの時代と言われています。変わりやすく不確かな複雑なあいまいなVUCAな時代は予測困難で、子どもたちにとっては不安を伴う時代にこれから突入してきます。

中央教育審議会ではこんな言葉を見つけました。「予測できない変化に受け身に対処するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要」。私たち教職員チームはこの言葉に深く納得をし、教育現場はさらに混迷の

時代に入っていくけれども、よりよい社会と幸福な人生を創る力。これこそが真の学力と言えるのではないか。この真の学力を育てるために、誠実に教職員チームで英知を結集して実践を積み重ねていこうね。そんなことを、確認をしているところです。



実際に「自分さえよければ」では震災は乗り越えられなかった。間もなく震災を経験していない子どもたちが小学校の全てになってしまいます。だからこそ、その経験を、震災があったという事実だけでなく震災を乗り越えて何を学んだのかを、子どもたち、学校は伝えていかなければならないと思います。

時間になりました。こんなところで私の話は終わりにしたいと思います。まだまだ語り尽くせぬところもありますが、何か質問がありましたら後でお知らせいただければと思います。どうもありがとうございました。

残りの５分は先ほどのチームでどうだったかという話でもいいですか。

では、先ほどの皆さんで、ここは少し気になるけれどもとか、ここを聞き逃してしまったとか、ここはどうなっているのとか、私はこう思ったけれどもということがありましたら、おしゃべりタイムを４分ぐらいでお願いしたいと思います。お願いします。

（グループ交流）

私も大変勉強になりました。このご縁に感謝申し上げます。ありがとうございます。

【質疑】

＜質問＞ありがとうございました。私は震災が起きた当時は東京にいたので、その場で被災をしたわけではないために、いま同級生の人たちや震災を経験している人たちに震災のことをどう聞けばいいかが分からないということが正直あるので、そういったところを先生が子どもたちと向き合う中で何を感じられたのかということをお伺いしたいと思います。

あとは、震災から時間がたっている中で、語り継ぐことをしていく上で必要な最も核となる部分があるのであれば教えていただきたいと思います。

藤坂　そうすると核になるところ。どう接するかですよね。でも、安易に分かる、

分かると言われると「分からないでしょ」と思ってしまうので、「分かる」と思わないほうがいいかもしれません。ただ聞いてほしいだけのときがあったりするので、寄り添っていただけるといいのかな。分かったふりをされて腹が立った時がありました。

もう一つありましたね。

質問者　核となる。

藤坂　何が核になりますかね。防災教育の核。

質問者　震災を語り継いでいく上で、いつも分からない子たちの。

藤坂　語り継いでいく上での核は事実。私たちは語っていくうちに都合のいいことを語り出します。事実なのか、フィクションなのか、混ざってしまっていくのですね。何が事実で何が。なぜこうなったのか、何が起きたのかを正しく伝える。

石碑がありますが、ああいう事実を語り継ぐ。思いを語り継ぐことはよくできますが、事実を語り継ぐことはとても大切で、伝承していくことが大事です。そこではないかと私は今のところは思っていますが、2年後には変わってくるかもしれません。ぜひ確かめていただければ。ありがとうございます。

質問者　ありがとうございます。

＜質問＞ありがとうございました。私は防災教育に興味を持っていて、東北で話を聞いた感じだと、まちづくりの中に子どもたちが参画して、プロジェクトとかもあったように、そのルーツに東日本大震災があることに子どもたちが気付き、自分のところだからということが東北の場合だとあると思います。それが震災を経験しない関東、関西の場で、教員として防災教育をファシリテートしていく上では今後重要になってくるのではないか。お考えの点がありましたら教えていただきたいと思います。

藤坂　東北以外のですね。よく石巻に来られる方々が多いです。特に南海トラフ関係の関西の方々。そうすると大川小を見て、「山に逃げればいいじゃない」と簡単に言いますが、実はそこには家があり、逃げるには道があり、山に行くまでは結構大変だったのだというようなことはよくあります。それで、ここで何が起きるだろう、起こりそうもないけれどもこんな困難が起きるだろうというイメージを先生方で共有していく。ここで起きると困難は何だろう、ここでこうなったらどうなるだろうという想定外を想定する力をトレーニングしていくことが必要かな。

準備が全部そろった中で避難訓練をしてしまいますが、より過酷な避難訓練。私たちは休み時間とか放課後とか帰っている途中とか、いろいろなシチュエーションでの避難訓練も増えました。避難訓練は増えて大変ですが、子どもたちは真剣です。先生方も、もしかするといつもどおりの避難訓練でなく、こうなったらどうする、学校に１人しかいなかったらどうするということを考えるトレーニングが必要になるかと思いますが、お答えになっていますか。

質問者　考え方がすごく参考になりました。

さらに１点ですが、私は中学校２年生の時から１年に１回から３回ぐらいのペースで毎年、東北を訪問して、中・高の時は学校の有志で、大学に入ってからはまた有志で、プロジェクトでやってという感じで、研修という形で勉強をして、その勉強したことを伝えるということをしています。こういう形を今後、教員になった時に自分がファシリテートしていかなければいけない立場になると思います。

年月的にはもう 12 年なので、東日本大震災があったからと思いながらというか、そういう形で行くのは東北側の方からしたらどうなのかなということが純粋に気になるところで、先ほど学びに来る方もいるとおっしゃっていましたが、どうですか。

藤坂　ありがたいことだとは思っていますが、実は支援の時も本当に必要な支援と、付き合いの支援がありました。一番迷惑だったのが、千羽鶴を送ってきて感謝の手紙を書けと言われ、「えっ？」ということがありました。だから、本当にその学校のニーズのマッチングというか、必要な支援をするためにということであれば。

そして今はもう支援というよりは、むしろつながりをどう継続するかですよね。そうすると続けていくことに意味があるかと思います。私たちは忘れられていないということがすごくありがたいと思っていますし、語り部たちの活動も続いているので、ぜひぜひ。

質問者　では、続けていけるように私も頑張りたいと思います。

藤坂　私たちも現場でさえ風化していくので、そうやって思いを持っていただける方の存在がとてもありがたいと思います。

質問者　ありがとうございました。

藤坂　ありがとうございます。またお待ちしています。